



北陸朝日放送 下田武史アナウンサー 短いコメントにも キヤスターとしての 責任がある

第4回 卒業生 職場訪問

卒業生の職場訪問シリーズ第4回は、アナウンサーの下田武史さん。下田さんは江戸川大学社会学部(現メディアコミュニケーション学部)マス・コミュニケーション学科を2000年3月に卒業した7期生。出身は東京都。新卒で青森朝日放送に入社して、現在は、石川県金沢市にある北陸朝日放送で、2016年4月からアナウンサーとして活躍している。(撮影: 増田朱音 取材・文: 小川茜)

当初の取材は9月7日を予定していた。だが4日から続く記録的豪雪により飛行機が欠航。取材ができた3月26日には、金沢市の最高気温が20度近くになり、兼六園では桜の開花が始まっていた。

北陸朝日放送のニューススタジオでは、「お花見シーズン前に金沢市の職員が、広小路周辺を清掃しました」と下田さんの相方、森重有里彩アナウンサーが原稿を読み上げていた。夕方のスーパーJチャンネル内の、石川県内ニュース放送後、下田さんにお話を伺った。

詳しくは後ほど説明をするが、下田さんは一度アナウンサーを辞めている。その後、アナウンサーへの復帰を考え始めていたとき、知人に紹介されて北陸朝日放送の中途試験を受けた。2年前のことだ。

「朝日系列が放送する高校野球の実況を、やりたかった」。下田さんも高校球児だったのだ。

115万人石川県民
すべての視聴者が
納得できるまで
考え抜く

この日は、加賀市の温泉地で
部屋に食事を運ぶだけの人手が

もの。その人が思っていることが出てきてしまう。そういったなかで、視聴者が納得できるように考えて発言しています。

地方局では
アナウンサーも
記者として
現場で取材をする

足りず、やむなく食事を食堂で提供する是非について放送していた。宿泊客、旅館経営者、従業員それぞれの立場からの見方があり一筋縄では解決しない問題だ。ひとつお話し話を話し終えたあと、「現状も理解できる。部署食の重要性について改めて考えたい」とさざりると一言加えたが、このコメントに下田さんのプロフェッショナルリズムが表われている。

社員数が比較的小さい同放送局では、アナウンサーも記者として取材に出ることも多い。それは、地方局では一般的なことで、以前勤務していた青森朝日放送でも福島中央テレビでもそうだった。

この一言はアドリブではない。特集VTRは記者が思いを込めて製作したものだ。「だから事前にしっかり見て、しっかり考える。コメントをすることは、キヤスターとしての責任」という。115万人の石川県民すべての人が観ているわけではなく、自分が伝えたことによる影響力は大きいという。VTRをよく確かめ、放送直前まで相方とコメントについて話し合い、言葉を考えぬく。

「視聴者の受け取り方を考えるながら発言するのは難しいですね。ありきたりなことだけを言っても面白くないですし、でも、なるべくなら人を傷つけない。視聴者が『そうなんだよ』って思ってもらえるようなコメントをつねに考え続けています。言葉って訂正が効かない

ね」。

大学生時代はバドミントン部に所属していた下田さん。バドミントンの取材をしたかと思っていた。そんな時、青森で将来を期待されていたバドミントン選手、藤井瑞希さんの高校3年間を取材することができた。その後、藤井さんは2012年のロンドンオリンピックに出場。女子ダブルスで銀メダルを獲得。「オリンピックに出る前から出会えて、嬉しかったですね」。



1. スーパーJチャンネルでの定位置。2. スタジオ風景。3. 本番前の最終チェック。4. 北陸朝日放送本社。5.HABはHokuriku Asahi Broadcastingの略。6. 下田さんの使用道具。

「江戸川大学で先生から学んだことがすべてでした。授業をうけていた先生から「表情のあるテレビだったら通用するかもしれない」と言われた。結局、北は青森から南は鹿児島までの全国を回り、面接を受けた。長期間に渡って就活を続けられたのは、本気でアナウンサー

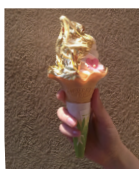
今も生きる、
報道記者の経験

下田さんはアナウンサースクールには通っていません。「江戸川大学で先生から学んだことがすべてでした。授業をうけていた先生から「表情のあるテレビだったら通用するかもしれない」と言われた。結局、北は青森から南は鹿児島までの全国を回り、面接を受けた。長期間に渡って就活を続けられたのは、本気でアナウンサー

現場にいると、全体像がみえない。自分がいる状況がすべてになってしまふ。時には常識を疑っていかねばならない。毎日「生死」を考えるなか、避難所では柔道整復師やマッサージ師が、手技で処置をしていく姿に感銘を受けた。こうと思ったら突き詰めて考えてしまっ性分の下田さんは、放送局を辞めて、医療系専門学校に入学し柔道整復師の資格をとった。柔道整復師として大成功したわけではない。けれど、人体についてはもちろん、日本の医療制度、商店街の個人事業主の思いや資金繰りの大変さなどを学べた。「放送局から離れた4年間、アナウンサーとしては回り道をしてしまったけれど、トータルで考えたら良い経験ができた時間だったと思う」。

下田先輩の好きな金沢

「金箔を食べて、鼓門で記念撮影をして、インパクトの強さならこれでしょう」



アナウンサーだからもっと食レポがあるのかと思ったら、なかなか、と笑顔の下田さん。とはいながらも、グルメ情報にはめっぽう強い。

金沢は夏がオススメのシーズンだという。暑いときに食べる、金箔総合企業「箔一」の「金箔のかげやきソフトクリーム」が下田さんのイチ押しだ。箔一(はくいち)

の語呂に合わせて891円。アイスにしてはちょっと高すぎるのではないかとおもえるが、実際に金箔を食べるとそのゴージャスさに驚く。食べる価値はあるという。「人間、金には惹かれますね」。

金沢の観光名所といえば、兼六園や近江町市場は外せない。それに加えて、下田さんは金沢駅が好きだそう。とくに鼓門。初めて見

たときのインパクトが凄かった。「観光都市の玄関口として金沢のイメージを作るのは、あの門だと思います」。

2005年に金沢のシンボルの一つとして造られた門は、大人気フォトスポットとなった。昼夜問わずスマホやカメラを向ける人が絶えない。「写真を撮りたくなくなる気持ちになります」。

内定は全国を回って つかみ取った

さて、時間を下田さんの大学時代に巻き戻す。

アナウンサーを目指したきっかけは、ラジオ番組が好きだったから。半年間で750枚もの

はがきを投稿するなか、熱心にラジオを聴いていた。もちろん、就職活動ではラジオ局を受

けた。けれど、書類が通っても1次試験で落とされてしまうこ

とが多かった。

ラジオ局はテレビ局と違い、映像なしで声だけの勝負だ。だから求められる人材は、男性

だった。低い声。女性だったら高い声。下田さんの場合、男性

としては高いトーンの声質だった。ラジオ局には適していな

かったのだという。さらに、笑ってごまかす未熟さもあった。

下田さんはアナウンサースクールには通っていません。

「江戸川大学で先生から学んだことがすべてでした。授業をうけていた先生から「表情のあるテレビだったら通用するかもしれない」と言われた。結局、北は青森から南は鹿児島までの全国を回り、面接を受けた。長期間に渡って就活を続けられたのは、本気でアナウンサー

に

なり

た

ら

なりたかったから。当時はあらゆる局を受験するのが当たり前。書類だけなら数え切れないほど出した。面接まで進むと、本気な人とはどこに行っても

合った。「あいつが受ければ次は僕かな」。当事者同士は力の差が分っていた。

キー局は記念で試験を受ける人もいて、フジテレビの倍率は1万倍だった。地方局だと、地

元と本気の2種類の人になり、倍率は1000くらいに下がる。

それでも100分の1だ。

地方局が入社しやすいというわけではない。1人が辞めない

と、1人が入社できない。アナウンサーは狭き門なのだ。

内定を得た青森朝日放送は49社目だった。経験者と新卒を合わせると倍率が128倍だった。

下田さんは青森朝日放送から転職し、2009年には福島中央テレビのキャスターになった。2011年3月11日、東日本大震災が発生。震災現場の最前線に向かった。

どのくらい大きな災害なのかそれが人災なのかどうかは、

現場にいると、全体像がみえない。自分がいる状況がすべてになってしまふ。時には常識を疑っていかねばならない。毎日「生死」を考えるなか、避難所では柔道整復師やマッサージ師が、手技で処置をしていく姿に感銘を受けた。こうと思ったら突き詰めて考えてしまっ性分の下田さんは、放送局を辞めて、医療系専門学校に入学し柔道整復師の資格をとった。柔道整復師として大成功したわけではない。けれど、人体についてはもちろん、日本の医療制度、商店街の個人事業主の思いや資金繰りの大変さなどを学べた。「放送局から離れた4年間、アナウンサーとしては回り道をしてしまったけれど、トータルで考えたら良い経験ができた時間だったと思う」。

インタビュー中は、爽やかな笑顔で自分の気持ちを飾らず、隠さない。それはアナウンサーだからではなく、もともと温良な人柄だからだろう。

最後に、江戸川大学生が就職するにあたってのアドバイスをもらった。「理論的な考えの人

も必要だと思うが、反射的に動ける人が職場にいると頼もしい。若さ・明るさ・行動力で勝負してほしいですね」。

最後